石堂丸苅萱物語

へ13
3113
4

石堂丸苅萱物語 四之巻

曲亭馬琴戯編

○石堂丸千鉤の仇を撃く。父と共もに名を揚げ家を興ふよろこび。千引ぬきくび繁光をあらそ

加藤繁太郎は父〻母の喪をとりて。公持例るゝとおもへども忌ども果く。父の繁光ホヤ詰ひ。従者只一人を伴ひ。箱根の温泉ふ赴くとて。内且六ヶ月且七ヶ月彼山ふ湯治しく。一家ホゆ爰を隔てゝありしかは土屋ホ知て繁太郎とりのいひふれし。翌の日。ゝ

門へ13
號3113
卷4

相ひ〻ふ。互ふ雙陸の目をあらそひしりは論をもいづし。
拔あつく戰つゝ。蘩太郎が從者ハ箱根權現へ參りく
居あわせど。且七が從者一人。この眸響とゝろく。次の間より
走り出く。主を打せ〻て。太刀ひらめかして打〻と蘩太郎
そのもせど。先ふすこし且七が從者を一人矢庭ふ切ふせ
ぶ。その外も夥深手を負ひ。打太刀ちゞろなりしゑ。且七ゝれ力
玩ぶ。ゝみかゝく切るほどふ。蘩太郎大ふ叫び。ゆゝれ大内
且七。波瀾道の双とりくゝるれを離さゝ。ゝが父蘩先。ゝと安
穏ふおさまらん。やがてゝ兄とのゝ〻を。這奴ふ

りのおいつせそゝて。且七ゝ起ゝつゝ蘩太郎が。胸のあたりへ入
刺ゝほゝ。主從顔とゝあゝて。走り去ゝんとゝれ折ゝゝ。
石堂九ハ関東ふ下向ゝく。且七が湯本ふ逗留せるゝゝ。
すゞその容子と窺ん爲ふ。その外も湯治ゝるおりゝらゝく。
この処ふ來ゝて。目今蘩太郎が仇とその名を名告ると
ゝ。ゝけゝが異母の兄の且ゝ。蔦直ふ走りへゝふ。蘩太郎ハ既
ふ離ゝ。仇人且七ハ走路とりゝあく生んとすれと。石堂その前人
ふ立ゝさゝり。筑前古賀村あく。祖父丹助と擊て逐電ゝゝ
漆川權平。今亦ゝが兄蘩太郎ふ切害ゝ。千鈞の仇やい逃

石堂丸
不意ふかに
且七主従
を撃うつ

さてゝと告もあへず。水も滴たゝぬ且七が細首丁と打おとし。之
を刀ゝ且七が従者を切くゝ二段とゝ。袖引ちぎり且七が首
髪をつかみ押裏ゝ。ゆゞ地とも出去り。折しもほうちう
居くゝ人もあり合れば。ゝゝくくのゆゝ去るのゆゝ。蘂太郎が従者ハ。
ゝゝ果ゝ後。箱根權現より立ゝり。主の敵ゝゝゝ。亦仇人
且七主従ハ伊勢のゆゝとも去ゝ。繋ゝ立退ゝゝゝ。相打あい且七が
首のゝゝえゝ。あやゝゝ。人ゝゝ罵あふゝ。ゆゝ驚ゝ所
の敵ゝゝゝけねど。且七も既ゝ斃ゝ。蘂故問諱むゝも
あゝねば。ぜひゝ蘂太郎が亡骸を鎌倉ゝ扛ゝ。緑

由と蘂光ゝ物ゝゝ。蘂光ハ妻ゝ後ゝゝ。一年も
ゝゝ只一人の愛子をゝしゝ。哀悼の涙禁ゝゝ
ゝ。ゝゝも當ゝゝ子の仇を討ゝゝハ何人ゝゝ
且七ハ昔人を殺せゝゝゝ。それゝ寃ゝ報ゝ。いと不審
ゝゝ。只顧疑ひ惑ひて。泣く蘂太郎が牡丹遣り
ゝく。追善形の如く営ゝ。且七が兄大内且六も。箱根ゝ
の椿事ゝ。ゝく大ゝ驚ゝ。ゝゝが屍を引ゝゝ。葬ゝ果ゝ且七
ゝゝの首を携ゝ。ゝく立退ゝゝ。蘂光ゝ由縁の
ゝのゝゝ。ゝゝの次ゝ窺ゝ。この怨ゝの人ゝ。ゝゝふ

ふくこうて居こうれる時ゝ建保六年八月十五日。將軍實朝公。
鶴岡社參の下向ゝ。社頭なる銀杏の下ゝちびゝ虎と建く
迄。近從の武士ゝ宣ひられへ。今この銀杏の樹ゝ當く。鈴の音
頻ゝすえうう。その音玲瓏とゝく尋常のものゝそへこと此
鈴の彼処ゝかくとしる。定めく故ありねべゝ。まれるものあらハ審
ゝやとべゝく宣ひられへ。天野六郎政景とゝく申く。このものゝむし
頼家卿秘藏あし讓花鈴ゝ。鬼の爲ゝ盜れまくり。これを取ゝ
射藝無双の武士ゝ仰せ。射くとくしやうべられへ崇あり。
大輔坊源性ゝ勘文とりくゝ申せくるものゝこのものゝネつて臣ゝ

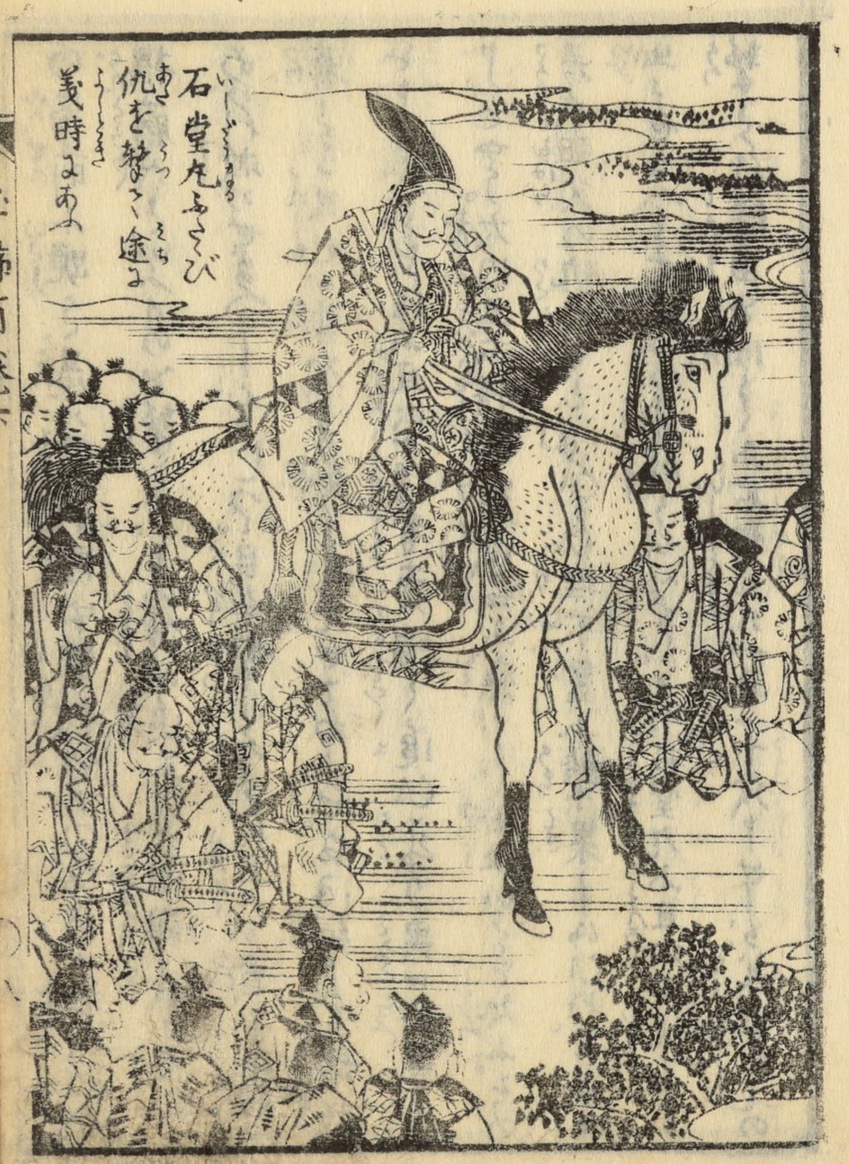
妹夫加藤繁光と氣色ゝ蒙り長く所帶を没收せられへ
縁由箇様くなりとて繁光三年ゝ間。筑前ゝ支越て射
藝ゝ修行し。その後鎌倉ゝ立くとゝ。頼家卿薨去
ほくくれへふくく堅とうしなくく。今ゝ名越切通ゝ僑居
とくれようしゝ迹く。彼是審ゝ申えあられへ實朝公ゝ食て然
らへ源性と召せと仰とくれよゝ走衆うけのりく。時と移さで
源性と持くゝふりね。實朝公ゝ鈴のものと尋くゝ源性ゝ
申ところも。政景ゝ申と趣とつゝ違くりくゝ。實朝公ゝ
嗟嘆くゝ。かゞりの鈴と射く落と武士ゝ。十八箇年徒

ふ。相ふかうらーおさうおこそ越度なれ。又今繁光をコロ出
ちく鈴を射とゝせんと思へども。鈴は二つなれと一人ふたりを射る。
縦一の矢空うしぐとも。二の矢を射損ぜば。その功徒ごゝうゐん。
繁光とゝもふ。誰か彼鈴や射おとゝさんと宣へば。三浦九郎澁民
班と生くやとせう。大町ゝれ武士の浪人。大内且六郎とゝ者
そ繁光ふも勝るるりのくゝ。彼ふ命ぜゝれば万ゝ一つも過
はいーとゝふど。實朝公點頭せまひく。ちゝばそのりの中。
仰ちくゝ。繁光あい政景や談ゝ。且六郎ふ澁義や淡ゝ
く。明日已の刻ふ射ゝむるゝ。これ又ゝゝ為つゝゝれば

ゝるゝゝゝと仰含められ。ゆゝて営中ふうりふゝれ。ゆふ
天野六郎政景ハ鶴岡より直ふ繁光が家ふゆゝゝ。
命の赴くを伺人出邊當ふ家を奥とゝいうのはし速ふ用
意ーゝゝべーと促せば。繁光泫然とし く落涙ーゝ弓矢の
冥加ふ稱ひ。武運いちゝ渇ゝゝ。今この仰を蒙り忽地
宿望と遂んゝ。ようゝ憔悴うりゝ。只ゝゝゝ妻ふ後と
子を先ゝゝ。只身ゝゝゝ繁光ゝ。所領ゝゝ
ゝゝゝ。誰ふ後栄を遺ゝゝ。ゝゝ歎の中れ歓び歓の中
の歎ゝゝ。ゝゝ子の忌も既ふ果れば。固辞ゝゝふゝ。

さくふの糸ぐべーと癒る。猛ふ弓ふ強を張り。たーなをりてる
大紋烏帽子なのどをり出く。次の朝をぞ移るる。大内且六が
かさみも三浦偽義が通達ふよりく。小〻出仕の用意成なー。
繁光ふ鼻をにうせく。日来の鬱憤をちふをべーとて天よ訪び
地ふ訪び次の日つくく花〻ちく打扮。矢と負ひ弓と携へ。その
外ハ馬上ふく。従者七八人と前後ふ立せ。三浦偽義が屋敷へと
く起く折しも年紀十五六なる旅人物の蔭より走り出いふ
深川權藤六。それ〻十五年以前汝が爲ふ勢ふ且てる冊助が孫。
石堂九郎。向ふ箱根の湯本ふ於く。權平美勢ふ祖父

の仇人のぐとはーく名告りけく。刀と打ち嗚〻かれば且六
驚とせーう顎然と打ちひりのくーと孩児が挙動なる。それ
そのむし丹助と駆られば〻て今将軍家の召ふよりく出仕
の途中妨せバ反逆ふひくーんを退ぞと呼りつ。弓ふ矢
つぐひく兵と發ちを。石堂憂と切折く。先膳ざぶと切つられば。
且六ハ二の矢成刺なる。馬より撞と落ちと起くーも立ぞ
首打むくーく髪ーく提くく走り去く成且六が従者ふ。透間もなく
追蒐くり。浩処ふ執權北條義時朝臣この日供奉ふ爲只今
出仕の路をぐふ折くく来あくくとくく。石堂九ハ義時


石堂先ちさびあさ仇を撃つ途よ
美時よあ

の馬前ゑ跪く。是ハ筑前國古賀村のものなれが祖父の仇
權藤六といふものと謂ふ。その徒ゑ追ふ事頗難義ゑ及へて。
あらん敵ハせむ人ハ〻しかしつ。目今擊ふ所なれ且六が首と赤腰ゑ
著ふる且七が首なりとも知ふ細しく緣故
をトさんとなれふ。且六が從者ハ端〻追ひ來り。異に同音に
ヤトさやう。大内且六將軍家の召ゑ應じ出仕しと処ふ。その
若人祖父の仇人とハ。理不盡ゑ擊果しんひねとも
出させ給ハ〻ハ。時ハ石堂丸ゑ且六が仇と
擊ふ緣由を問ふ石堂丸ハ一五一十ゑ申せハ。父藤光の

ものとハ生涯と。その義時朝臣のいハく。縱ハ彼ゑ祖父の仇
なりとも。且六ハ台命ゑ奉ふ。鶴岡の社頭銀杏の樹ゑ
ア〻ふ鈴を結ふるものなれハ。汝私の意趣とめ〻理不盡
ゑ擊ふ事ハ。その罪科ハ〻と仰ふ。それハ石堂丸莞爾として。彼
且六が射藝ハ。その賞美ふ〻ふものゑあ〻と。彼その
某を射んといさせ〻ふ。その矢終ふ〻ゑ〻ふ。これゑ〻その
末熟ゑ〻ふ〻ふ〻ふ。且六縱存命ふ〻ふ。晴ある射人
ゑ〻ふ〻ふ〻ふ。某ゑ命せられ〻ハその鈴を輙く射
ふ〻ふ〻ふ。我時期ふ。人傷若無人ふ〻ふ〻ふ

廣言ゆるしなくば且六が従者ども退しく主の屍を扛
りくくらせ且六且七が首と石堂が行李を後卒ふりとゆゞて
石堂丸と称し鶴岡へとゝり久れば加藤藤光ハ天野政景ふ
ゝ出て先〳〵伺候せり程なく實朝公も出こせ給し
ゑ義時ハ前ふ乗りく且六が横死石堂が仇討のゆゑのや
とこゝを審ふ中えあり彼若人おぼえなくく扨廣言ハ吐
ぞうゝと今彼とゝりく且六ふりせ彼鈴を射さゝるいまく
射おとゝりくその罪を赦し射ぬるせば法のごとく行い
ゝくゝ中とゝ三浦胤義つとふりているその義ハなのはゞ

りこる癖者ふとの大事況命ぜられるハ天下の効慮東覚の
武威を落とゝ似ゝり只〳〵這奴を誅せふ且ゝとそねゝ
けとゝく強くゝ中とゝもれども執權義時かくゝとうへゝ彼若
者が射藝況試こその後ゝもかくもとうゝあべゝて猛ゝ石堂
丸ふ烏帽子衣服太刀ゝ況ゝり藤光と立ゝ
件の鈴ゝ射ゝるふこれとゝるりのあるせ悠や彼若りのよゝ
ゝ所烏とゝとゝく矛の咎を増べたふゝて呼ゝ
なし藤光も若りのゝ体公ふしとゝ且しゝ汝上れ枝
ゝ鈴況射ん欲又下ゝを射るやゝと問ふ石堂答ゝ某そ

いづれもあれ仰の道ふ射りべしといふ。繁光ゆゑく憎さ
あくしとおりひしく。ちうくばくれい下あれを射とうべし汝が上なる
城射られよといつふ。そこ汚もいくく賜くる弓と携へ矢八已が
行李の裏なるをとりよりて繁光と左右ふこれ樹の下ふ
立むりひしくれ勢意氣揚くとつくつもごくも臆くる氣
色なれバはげしも嘲哢くれ人もこる息もせどこれをこる時
ふ繁光ふ矢刈くく公の中ふ苅萱地藏を祈念しつ満月
のごとく引たぼりおとし堅めくTと發せば銀杏の小枝をふつ
と射切り。鈴ハかくく音くく落くとくく石堂も亦公

中ふ地藏菩薩を祈念くくりくくと固め矢声をんくく切て
くるせハその矢あやまるで上なれ枝の銀杏のもふ三枚を射つ
やた。鈴と葉の間ふ挟ると。矢とくも落くところを石堂走りよつて
馬まふうくくくくくその爲体人間所爲とも出られざ見あん
百歩の外ふ柳のもとと穿といふ。養由基ふも優くべし。彼も
奇しこれも妙なりとそこの両人と誉る声洋洋平くくて志
ばしハ響も止ざりり。くくく繁光石堂丸ハ。ものく射とて
切くる泥と献上バ。寅朝公ぬくく貴美あくく。繁光が往の
悞と免され。所領舊ふよんてかくくれ。永く近従ふ石仕る

鶴岡に
八幡宮
黄金の箭を射る

ゐたりしが仰られ。亦石堂丸あり。義時とりわけ。汝が父へ仰のの
ぞ。由緒あるものの児子なるべし。石仕りべし。審ねもせと宣ふ。
是ハ石堂丸謹ぐ。父ハ未生の時ふ。鎌倉ふうりしべ。その面体
ちがふべんども。これあり。藝光子なる。石堂丸と呼ぶ。その頃日
関東へ下向つかまつりべと祖父の仇人を尋て尋あべく
ちひしるふいまぐ對面と遂ぐ。今日もべ。
鈴と射とるものと命ぜられしふ。大樓の御前と憚ぐ。いぐ名
告あるべしとかーあぞ。藝光ふ驚たぐ。こハ如何ぞ。
子ハ藝太郎只もとりあるべ近曾大内且七が屋ふ箱根れ

湯本あべく命を隠せり。この野ふ子といふものうてれ見ぐ
るー。彼ぞ。とこ涙偽りあり。よくく糺明あべ。ふかしと咲げば。
石堂かぐあべくさおぼともこうしふ。又が母千引一夜の契あり
るべ。詰朝父ハ地藏井の示現ありて俄頃ふ鎌倉へ立
りべ。ひしふ過世の縁しぬうぐ。その夜結胎てすれべ
もそ。ぞしその折しも祖父丹助ハ漆川權藤六兄弟ふ
切害せられ。母ハ患難の中ふ婦の道とちり。ひ子を養育ぬ
ひしふ極ふ。ぞ又地藏井の冥助あべく。武藝秘ふ
ゐる剃仇人の行方。今の姓名相貌すべく。審ふ井の説示ー

のふるよろこ。縁田と母お苦。祖父の仇且六且七と称まいり。元
をこめげうして父ふ是琴あうえとおりひ。はづ且六兄箸ろ事れ
容子と穎ひ。且七八箱根お湯治しくありとゆく。潛ふ鬼ひ
よれ折しも。又が兄蘩太郎。且七お殺されのひしぐ。寂期ま自他
の姓名と名告りるひしく行ふ。やくその人くあるるをもうきあ
ゆ所者ゆせと且七主従と殺ろう。それう且六を鬼ひしふ今朝
上仕のるゆをゆく途中お待うみ。既ふ仇と殺し盡しおはけるく
将軍實朝公の仰を蒙ア。そうぐも父ともふ晴なら射人お名
加らるる。古今未曾有の幸福なり。なほ疑ふ。それはたえ

あるくこうぐふ曉得ふくしとはして。携うし二條の矢と短冊
と遍ふ一ふる。蘩光忙しくとれをうえてげもむし
再會の信ふとく。利引ふふ。これ重代の征矢。自筆の短冊なり
られば。或ハ驚ア。或ハ感ひ。石堂丸が顔とつくくとうちえて。ちび
感涙をとうめかひ。寔ふ泳がいふとう。それ悲く兄ありうと
ゆうふ子ふくありうう。こハ卒忽なるゆやはるこそ越度うれ。親
ハるくうる子ハ育と。世の常言ふりれどして。鄙ふ生ちうるぐら
ふうまいこじく。祖父と兄が仇と撃。剣鎌倉ふ一とくぐうと
みあつくといふのあア。桃の鈴と射とうる。父ふ仇れ勝ア。

野中氏

つゝれ證據あるゝゝハ石堂丸ハ紛れもなく繁光が世嗣繁ふ
あらしゝゝ儲ゝゝれ妾腹の児子ゆゝゝゆゝとやられバ實朝公をくゞめ
まゐり。義時政景以下の人ゝも奇ゝゝれ親子が抱ゞゝゝ丸賞嘆
大きなるゝゝゝゝゝれさて實朝公を石堂をもうゝゝれ。今日の勸
賞として。先祖の舊領筑前半國をあたる。父ゝゝもふ勤仕いと
まゝたよ弧角せゝれ。彼矢と短冊をめしゝゝせゝゝゝゝゝふ矢い
繁光が持ゝゝるものと一般袖搦の下ふ朱とりゝ加藤石堂丸
とゝゝゝ。又ゝゝゝゝゝ。
府萱の関守ものゝゝゝゝゝ